

# 甘肅武威考古筭記

—— 平成9年度国際学術研究報告の2 ——

秋 山 進 午

## 1. はじめに

紀元前121年春、驃騎將軍霍去病にひきいられた漢の大軍は、匈奴の右翼を断つべく、黄河を渡り、祁連山をこえて河西回廊に突入し、休屠王が祭るところの祭天金人を獲得して長安へ送った。霍去病は夏、再び匈奴を追って西進し、居延海を越え、祁連山にそって進軍し、匈奴の大軍を打ち破り、休屠王を殺し、渾邪王を虜にした。この勝利によって、はじめて、漢と西域の直接交渉路が開かれたのである。漢が河西回廊に新たに開いた四郡の一つを武威と名付けたのは、匈奴に対するこの赫々たる武功を記念するからにほかならぬ。

漢代の武威郡は10県からなるが、その治所は現在の武威市であるところの姑臧におかれた。以来、この地は武威郡の中心として、漢魏晋代の文物を蘊蔵するのは勿論であるが、次なる五胡十六国時代には五涼の首都として、重要な役割を担うこととなる。隋唐代の涼州時代も西方民族との接触・交渉の拠点として枢要な位置を占めてきた。

今回の国際学術研究において、初年度、平成7年に寧夏回族自治区の銀川まで、長城線を踏査してきた我々にとって、次の目標はこの甘肅省武威である。平成9年11月25日、明治大学文学部の氣賀澤保規氏、東京国立博物館東洋課の高浜秀氏と私の3人は成田空港から出国し、北京を経てその夜には甘肅省の蘭州に到着し、甘肅省文物考古研究所副所長李永良氏の出迎えを受けた。

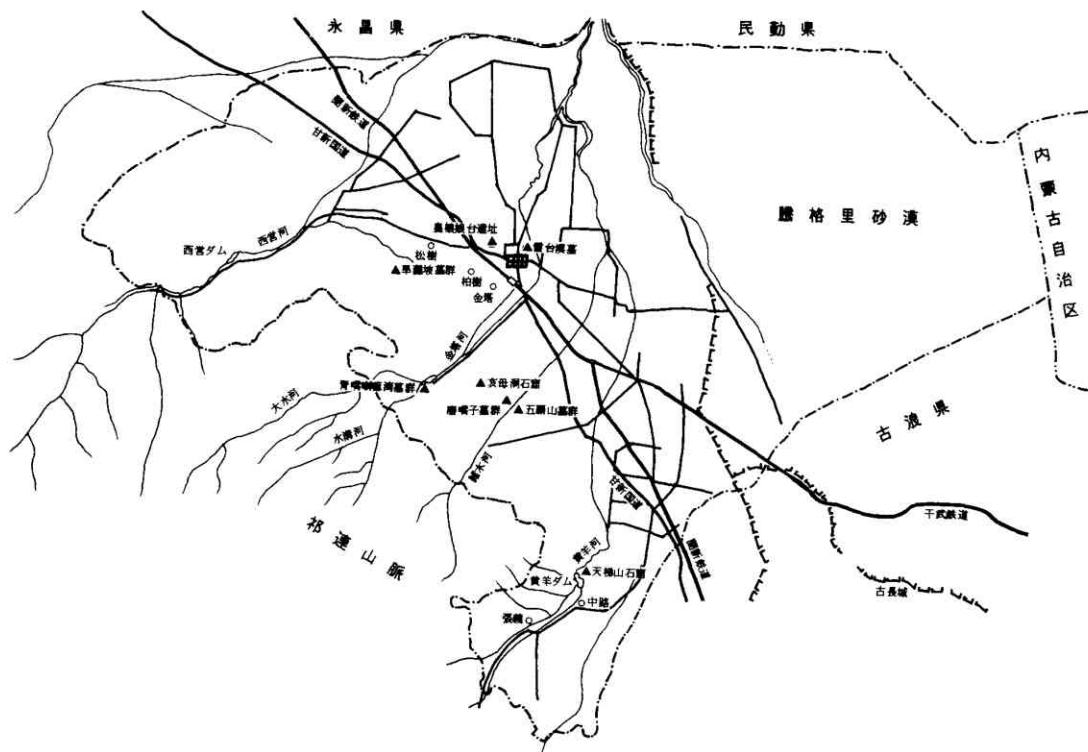
翌26日は午前中、戴春陽・李永良副所長らと日程打合せのあと、考古研究所の研究室で何双全氏らから、最新の資料を幾つか見せていただいた。とりわけ、1994年に新たに発見された、礼県大堡子山の秦公墓地から発掘された玉琮2点は、それぞれ2・3号墓から出土したものである。この秦公墓地は秦が陝西省の雍城に都を築く以前の王墓と推定されるもので、秦の最初の都城の発見の期待も高まっている重要な発見であるが、今

回は現地見学の時間的余裕がなく、改めて現地を踏査した上で報告したい（付記：現地踏査を1998年8月に行うことが出来た）。

さらに、甘肅省玉門市火焼溝出土の彩陶直立人形罐（『中国文物精華—1990年』図版-12）、彩陶有蓋四耳罐、青銅四羊頭付杖頭（共に1994年、近つ飛鳥博物館開館記念展出品）などの四霸文化の逸品、それに敦煌・酒泉魏晋墓新出の画像磚、また、敦煌懸泉置の大量の木簡と長大な壁書などは、いずれも近年の甘肅省文物考古研究所の重要成果の一部である。

午後、いよいよ武威へ向かう。一行には文物局綜合処長の張利勝氏が同行して下さる。氏は武威の副市長から文物局へ移られた方で、武威での見学が順調であったのには氏に依るところが多いことを御礼申し上げる。

午後2時に蘭州を出発し、永登、天祝を経て5時、烏鞘嶺に至る。この峠を下るといよいよ河西回廊である。峠からは長城が望める。6時半すぎ武威の宿舎天馬賓館着。武威市では車副市長、趙文化局長、蔣博物館長ら文化部門の幹部総出で歓迎して下さい。武威での参観は27日午前中、五壩山・磨嘴子・旱灘坡の漢魏墓群と亥母洞石窟、午後は雷台後漢墓、羅什塔と文廟の武威市博物館。28日午前博物館再訪、そして午後は天梯山石窟見学のあと蘭州へと短い滞在ではあったが、武威の主要な遺跡をほぼ見学することが出来た（付図参照）。



付図 武威市本稿関係地図（武威市交通図より作成。よって正確さは保証し難い。）

私はかつて、この武威の雷台漢墓と磨嘴子漢墓群をめぐる論考を書いたことがある<sup>1)</sup>。それ以来、いつの日にか武威を訪れ、実地にそれらの遺跡を見学したいものと願っていたが、図らずも、今回実現できたことは誠に有り難い機会であった。以下に、見聞記と併せ、これまでに各々の遺跡において報告されたところを再検討し、今後の研究に具えたいと思う。

## 2. 五壩山墓群

五壩山遺跡は今回の武威考察で、最初に訪れた遺跡である。武威市街からほぼ真南、約16kmほどの武威市韓佐郷紅花村五壩山にあり、祁連山をのぞむ台地にある。遺跡のすぐ西に雜木河が流れ、河を挟んで磨嘴子墓地と向き合っている。1983年に煉瓦工場建設によって発見され、1984-85年に甘肅省文物工作隊と武威県・武威市文物管理委員会によって発掘された。残念ながら正式な報告は出されておらず、『中国考古学年鑑』に簡単な紹介があるのみである。それによると、墓地の範囲は100万m<sup>2</sup>あり、600余基が確認されている。そのうち1984年に66基、翌年に36基が調査されている（図1-1）。

兩年とも、発掘された墓のうち1基は馬家窯期のもので、この地が先史時代からの居住地であったことを示す。'84年発掘の1号墓からは彩陶が4点発見されているが、そのうちの2点が1994年、近つ飛鳥博物館で開催された「シルクロードのまもりーその埋もれた記録一展」図録1・2図に写真が掲載されている<sup>2)</sup>。

また、1984年には魏晉墓2基、西夏墓3基が、1985年には魏晉墓1基が含まれているが、その他、大部分は兩漢代のものである。

簡報によると、これら兩漢代の墓は前漢末、王莽時代から後漢末までに至るが、王莽時期と後漢初期のものが多いといわれる。墓の構造は、すでに発表されている磨嘴子墓群と同様で、斜め墓道を持ち、地下深くに営まれた長方形土洞墓である。'84年に発掘された漢墓のうちで最大のものは、墓道の長さ14m、地下14mに長さ4m、幅2mの墓室を設ける。逆に最少のものは、墓道の長さ8m、地下3mに長さ3m、幅1.5mの墓室を持つ。

墓は多くがすでに盗掘にあっていたが、何基かは完全で銅・鉄・木・漆・陶器、染織品、袋入りの食物など560余点が出土した。

それらのうち、青銅亀形炉は『考古与文物』<sup>4)</sup>、3号墓木牘は『散見簡牘合輯』<sup>5)</sup>、鳩杖は〈近つ飛鳥図録〉59図にそれぞれ写真や釈読が掲載されている。

また、'84年の発掘では彩画壁画墓から、生活宴飲、舞踏、狩猟それに老虎図が発見された。〈近つ飛鳥図録〉71図に、そのうちの老虎図模写が掲載されている。

この壁画については、発見時に模写を行った甘肅省博物館の張朋川氏の論考がある<sup>6)</sup>。

それによると、老虎図は墓室の正壁にあり、虎の背後には樹の幹が描かれている。樹の左には女性3人が、右には女性1人が描かれているようである。右壁の壁画は大半が破壊され、僅かに下半分が残る。右方には仙人が立ち、その前に女性4人と子供1人がいる。中央部は破損が甚だしいが、向い合って端座する男女は墓主人と思われ、中間に侍女がいる。右壁左方は庖厨図である。左壁は中央から左方へは山林狩獵図である。樹木の茂る山並みと点在する動物が中央部にあり、左方に逃げる鹿を射止めようとする騎馬狩獵人物が描かれる。張氏によると、この壁画を持つ墓は、その上に後漢末の墓が築かれたために上部が破壊された。また出土の陶壺が王莽時期のものと一致するところから、この墓の年代を王莽時期としている。張氏はこの壁画を中国初期山水画として論じようとしているが、壁画画面が未発表の現在、詳細な検討をなし難い。

'85年度の調査についてはより簡略で、鍾（壺）・罐・奩・盤の陶器類、銅鏡、車馬器、貨幣、鉄刀、金頭飾等の発見を記すのみである。

### 3. 磨嘴子墓群

武威市新華郷纏山村磨嘴子遺跡は、五壩山遺跡から雑木河を隔てた西岸に位置する。墓地は西方の山地から雑木河に張り出した磨嘴子台地上に南北1000m、東西700mの範囲に密集して営まれる。1956年に甘肅省文物管理委員会蘭新鉄道文物清理組によって初めて発見され、土洞墓5基（M1-M5）が整理され、そのうち、床面の残存していた1号墓の調査状況が発表されたが、この墓地が一躍注目を集めたのは1959年7月に発掘された6号墓から“儀礼”木簡の発見によってである。<sup>7)</sup><sup>8)</sup>

続いて同年9月～11月にかけての第3次発掘によって31基（M7-M37）が調査されたが、そのうち18号墓から“王杖十簡”木簡が発見された。<sup>9)</sup>武威磨嘴子漢墓群はアルカリ性の土壌と乾燥地帯の特性から、こうした当時の文書・典籍の実物資料に加え、木製品、染織品、食料品などの腐朽しやすい副葬品を、そっくりそのまま保存してくれていたものである（図1-2）。

磨嘴子に対する第4次発掘は1972年春に行われ、35基（M38-M72）が調査された。そのうち保存が完全であった48・49・62号墓の3基が報告されている。<sup>10)</sup>

3基とも構造はこれまでの墓と同様、地下深くに営まれた長方形単室土洞墓であり、48・62号墓は共に夫婦合葬墓である。墓室構造の上で、62号墓が墓室入り口に石製の墓門を設けていたのは珍しい。3基とも様々な木製品、漆製品それに各種染織品や薬製品までがほぼ完全に保管されていた。報告では出土品の分析から48号墓を前漢末、62号墓を王莽時代、49号墓を後漢中期に比定している。

磨嘴子墓群の最近の発見は壁画墓の出現である。<sup>11)</sup>1989年7月、武威市博物館の孫寿齡・

図 1-1 五壩山墓地  
遠景は祁連山。

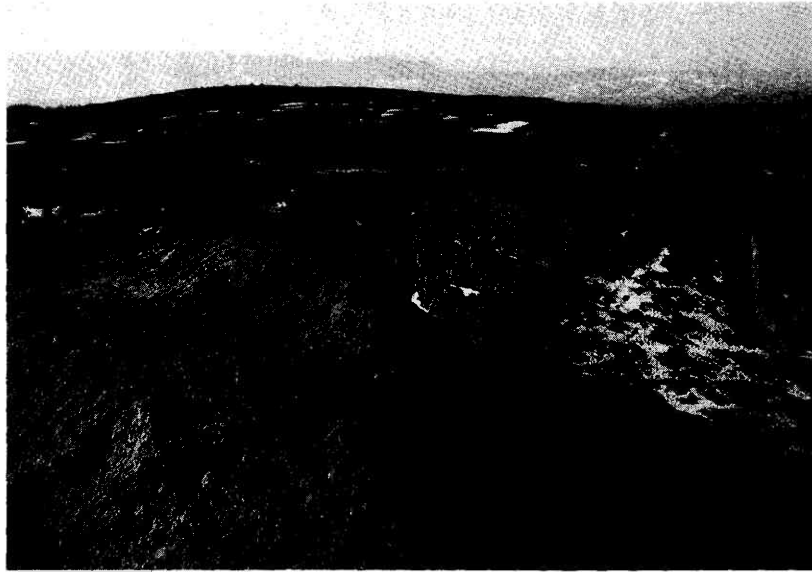


図 1-2 磨嘴子墓地  
人の集まっている所  
は壁画墓の位置。

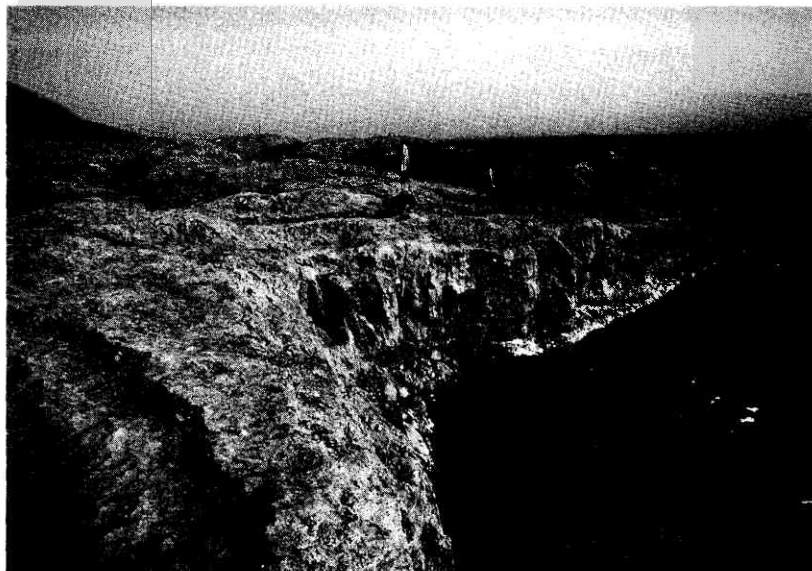


図 1-3 旱灘坡墓地  
遠景は祁連山。土盛  
りは現代の墓。



黎大祥氏が盗掘墓を発見し調査を行った。遺物は全くなく、前室に壁画が一部残っていた。斜めに下がる墓道に続き横長の前室が設けられ、その後ろ左右に縦長方形の墓室を二つ持つ構造で、磨嘴子墓群では大型に属する。壁画は前室の天井部と後部壁面の石灰面上に描かれているが、彩色については記述がなく、写真で見る限りでは墨線のみであろうか。

天井部には日月と雲気、後壁に雑技人物5人と鳥、左壁は羽人と羊、右壁に騎象仙人が輪郭線のみで描かれている。前節の五壩山壁画墓と併せ興味深い報告である。

この壁画墓は墓番号が付けられていないが、発表の順序からすると73号となろう。これら73基の墓のうち、詳細な実測図が公表されているのは22・23・26・48・62号墓の5基、略図が発表された1・6・73号墓を加えても8基に過ぎないのは惜しまれる。なお、年代は前節の五壩山墓群と同様、前漢末から後漢後期に至るものである。

#### 4. 旱灘坡墓群

旱灘坡墓群は東が武威県城の西南約10kmの金塔河から西は武威県城西約20kmの西営河まで、武威の南から西へかけて連なる祁連山麓に沿い、柏樹・松樹・紅星・西営の四郷にまたがり、長さ約20km、幅約1kmに及ぶ広大な墓地である。ここはまじかに祁連山を見上げる山麓で、間に谷一つ挟んで台地となり、常に乾燥し、岩混じりの土地のため樹木が育たない荒れ果てた土地のため、旱灘坡の名で呼ばれる。それだけに、格好の墓地として漢代以来引き続いて用いられた(図1-3)。

この地の墓として最初に注目されたのは、1972年、柏樹郷下五畦村旱灘坡で水利工事に伴って発見された後漢墓からの医药簡牘の出現である。地下約4mに営まれた土洞単室墓の構造は前述の五壩山・磨嘴子墓群と同様で、副葬品は土器6点、五銖銭とガラス玉、それに鳩杖にすぎない。男性木棺に収められた袋中の92枚の簡牘には、医学・薬学等に関する内容が記載され、後漢代の医药の水準を知ることが出来る重要資料である。

1974年、柏樹郷橋児村旱灘坡でやはり水利工事中発見された夫婦合葬土洞墓からは、土器、剪刃五銖銭と木製俑・盒子・屏風・牛車模型などが出土したが、牛車模型に反故紙が使われており、紙の実物資料として興味深い。<sup>12)</sup>これ以後、甘肅省では天水市放馬灘5号墓から木地図と共に紙地図、敦煌懸泉置から紙本文書、敦煌馬圈湾、金塔肩水金關からも紙が相次いで発見される先駆けとなった。<sup>13)</sup>

1975-84年にかけて、旱灘坡墓地において10余基の墓が調査され、木器、土器、染織品、貨幣などが発見されたが、これについての報告はなされていない。

さらに、1989年、柏樹郷下後畦村旱灘坡の土洞単室墓からも王杖木簡16枚が発見されている。棺蓋上に置かれた木簡と、棺の前部におかれた鳩杖のほか、土器、五銖銭、貨

泉、日光鏡が副葬されていた。木簡の1枚に“建武十九年(43)”の紀年があり、後漢中・<sup>15)</sup>後期の墓とみられる。

早灘坡墓地にはまた東晋十六国時代の墓も営まれている。1985年、松樹郷三畦村において28基が調査されている。<sup>16)</sup>『中国考古学年鑑』の簡単な報告によると、墳丘を持つらしく、墳丘頂部と墓道〔入口〕に大石を立てて標識とする、とある。墓の構造は土洞墓と磚築の両方があり、ともに斜め墓道、墓門と甬道、長方形墓室からなる。磚築墓の数は少ない。墓室天井はドームとアーチの2種があるが、磚築墓の墓室天井は盞頂となり、墓門の外に木造建築を象った照壁を築く。

副葬品は土器、銅器、木器、漆器、鉄器と染織品など総計70余点が出土した。そのうち〈近つ飛鳥図録〉61図に木製彩画連枝灯、62図に毛筆と木製筆入れ、63図に木牘3枚が載せられている。62・63図には墓号が共に19号墓と記されている。この木牘は墓主が生前授かった官職任命書の写しである。3枚にはそれぞれ建興四十三(355)・四十四(356)・四十八(360)年の紀年が記されている。〈近つ飛鳥図録〉の展示品解説部分の補記に記すとおり、この建興の年号は前涼張氏政権が採用した西晋の年号であり、この木牘によって早灘坡19号墓が前涼時期のもので、墓主が建義奮節將軍長史駙馬都尉姬瑜夫婦と確定された。

また、発掘の際、この19号墓から、墓に供えられた花巻が石化して出土したといわれる。新疆アスターナ墓地発見の餃子やクッキーより早い時代の実際<sup>17)</sup>の食物遺存である。また、彩色豊かな木製の馬が出土したが、この馬の造形は有名な武威雷台後漢墓出土の“踏燕奔馬”と同一であるといわれる。報告が待たれるところである。

## 5. 雷台漢墓

武威からの数々の出土品の中で最も著名なものが、この雷台漢墓から出土した“踏燕奔馬”であろう。燕のような飛鳥よりも、より早く疾駆する馬、とはなんと卓抜な造形であろう。

この“踏燕奔馬”を出土した雷台漢墓は武威県城旧城壁の北約1kmにあり、現在は周辺が整備されて公園の一角となっている。<sup>17)</sup>後世に墳丘を利用して廟が建てられたため、形状は大いに損なわれているが、元来の封土が基部において一辺約40mの方形で、高さは6mほど残っていた。報告によると、斜め墓道を持つ、と記述されながら実測図の墓道部分にほとんど傾斜がないことを不審に思っていたが、現地で見ると、雷台の西側はかなり広い池となっている。地下水位を考慮して墓を地上に築いたものであろう。墓道は長さ約20m、墓室部分の総長が19.2mであわせて40m近くとなる。これでは一辺40m



図2 武威雷台墓  
写真中央が2号墓入口、奥が1号墓入口。



図3-1 青嘴喇嘛湾  
3号墓出土木俑頭部  
（『隴右文博』1996-1  
〈創刊号〉より）。

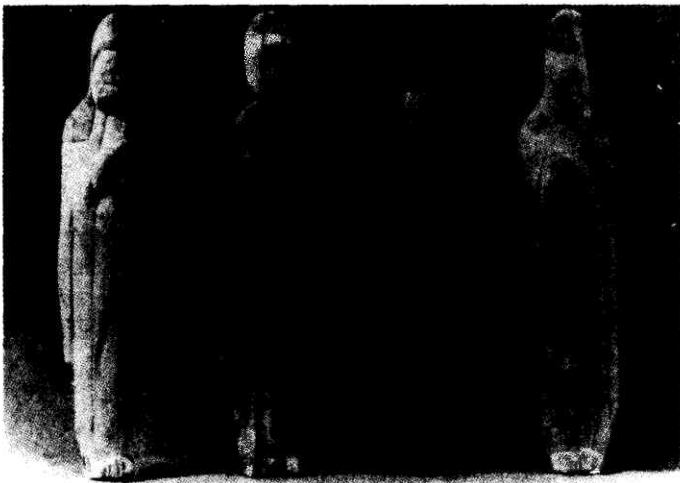


図3-2 青嘴喇嘛湾  
弘化公主墓(5号墓)  
出土木俑  
（『隴右文博』1996-1  
〈創刊号〉より）。

といわれる墳丘からはみ出してしまふ。元来の墳丘規模は再検討の要がある。

この雷台1号墓のすぐ南に2号墓がある。入口は現在1号墓と並んで開いており、間

は約40mほどである。こちらも1号墓とほとんど同一の磚築構造で、長い墓道と甬道、それに前・中・後室が縦に連なる。出土品が青銅馬の尾1点だけであったため、報告がなされていないのは惜しまれる。明代ころに築かれた雷台は東西60m、南北106m、高さ8.5mあり、この2基の墓をすっぽり覆っている。雷台が築かれる以前、この2基の墳丘墓は南北に接して並ぶ双墳のような状態であったのであろうか（図2）。

雷台墓の出土資料は現在、甘肅省博物館に一室をとって展示されている。とりわけ“踏燕奔馬”を含む青銅車馬模型は展示品中の白眉である。この車馬模型がこの墓の被葬者である張某將軍の出世物語りを、車馬行列の形で表したものであることは、私が先の論考<sup>18)</sup>において示しておいた。

## 6. 天梯山石窟

天梯山石窟は武威から南東へ進み、途中から祁連山の山中へ分け入ること20km弱、武威県城からは45kmの距離がある。天梯山の名は、この山が峻険で、まるで天に梯子を架けるようであるところから名付けられた。石窟は黄羊河に沿って開けた山中の盆地に面している。解放後、1950年代の末、石窟のすぐ西で河をせき止めて黄羊ダムが作られた。そのため、石窟は3段に作られているうちの中段まで水没し、大仏窟も大仏は腰まで、脇侍は肩まで水没し、地肌をさらしている。水没以前、石窟から取り出された仏像、壁画の一部、経巻類は甘肅省博物館に保管されている。現在博物館に展示中の三尊像は、第三窟左龕の三尊であろう。

この天梯山石窟をはじめて実地に踏査したのは1954年、当時華東美術学院教授であった史岩氏であって、各石窟の詳細な踏査報告がなされている。<sup>19)</sup>天梯山石窟は明代には26窟あったことが知られる。また、今世紀のはじめまで18窟が残存していたらしいが1927年、武威を襲った大地震によって西端の10窟ほどが崩落したほか、その他の石窟も大きな被害を受けた。史岩氏の調査では13窟が記録されている。そのうち、第1窟と第4窟が共に塔廟窟であって北朝時期の開鑿になるものの、後世の改修が著しくて創建当初の様相を窺い難いと報告されている（図4）。

天梯山の調査と相前後し、シルクロードに沿って、1950年代には敦煌以東に炳靈寺、麦積山、慶陽南北石窟寺等が、1960年代には金塔寺、馬蹄寺千仏洞、文殊山、昌馬等石窟寺、さらに1970年代には保全寺、張家溝門、蓮花寺石窟等が相次いで調査されたが、中でも特筆すべき発見は1963年5月24日、危険をおかして決行された炳靈寺第169窟への登臨である。このとき洞内で発見された西秦建弘元年（420）の墨書紀年は現場の人々を興奮の渦に巻き込んだ、と張宝璽氏<sup>20)</sup>が回顧している。

史岩氏の調査以降のこうした新たな研究状況をもとに、再び天梯山に光を投げかけた

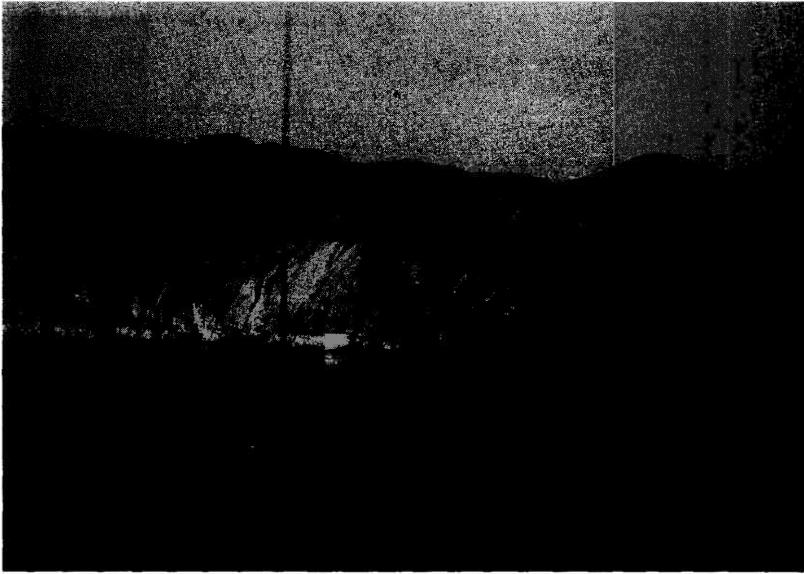


図4-1  
天梯山石窟遠望  
中央の白い部分が第  
13大仏窟前の護壁。

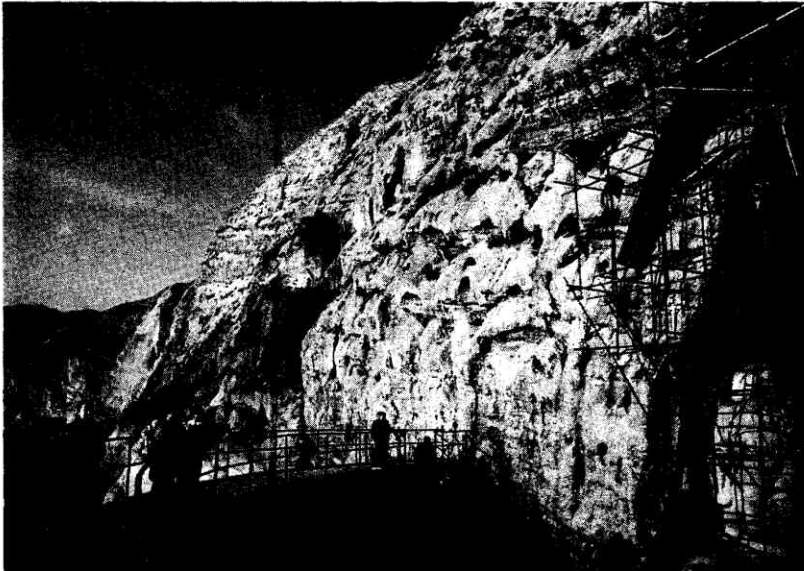


図4-2  
第13大仏窟から第1  
～第12窟方面を望む。



図4-3  
第13大仏窟修理状況。

のは宿白氏である<sup>21)</sup>。氏は史岩氏の報告のうち、中心に方柱を持つ第1・4窟に注目し、そのうち第1窟の復原を行い、同時に、敦煌文物研究所保管の、第1窟最下層の壁画に描かれた供養菩薩の様式と忍冬化生像連接文様の模写に注目し、この文様を新出現の初期石窟文様と位置付けている(図5)。

氏は続いて、甘肅省の酒泉、敦煌と新疆トルファン発見の北涼石塔を取り上げる<sup>22)</sup>。現存の北涼石塔12基のうち、紀年を記すものは6基あり、428年から436年に至る8年間である。これら北涼石塔の塔身は八角列龕となり、そこに結跏趺座の過去七仏と交脚の弥勒菩薩をあらわしているが、紀年で知られるこの短い間に、主像に思惟菩薩像が出現し、印相は禪定相から説法相が、仏像の服制が通肩から偏袒右肩さらに襟を広げ内衣を見せるようになるなどの変化を注意している。

北涼石塔のうち最古の紀年を持つ高善穆石塔は、今、甘肅省博物館に展示されている。また、白双旦石塔は北京の中国歴史博物館で見ることが出来る。北涼の紀年については多くの議論があるが、ここでは近年発表された王素氏のものの<sup>23)</sup>みをあげておく。

天梯山第1窟の中心の方柱については史岩氏が重要な記述を記している。即ち、“(中心柱は)上部が三層となり、どの層も上部が下部より広がっているが、このような様式は敦煌千仏洞の物とは同じでない。むしろ、酒泉文殊山、民楽金塔寺に同様の様式がある。”宿白氏は肅南金塔寺東窟・西窟と酒泉文殊山千仏洞の甘肅省博物館による壁画の調査記録を再録しているが、これら石窟の中心方柱の型式が、史岩氏によって敦煌初期窟との相違を指摘されたものであるというまでもなからう。

さらに、これら石窟が中心方柱にのみ仏龕を造りだし、周囲の四壁が壁画のみで飾られることを甘肅省文物工作隊の董玉祥・岳邦湖氏が指摘していることも重要である<sup>24)</sup>。

以上の諸点を総合して、宿白氏は次のとおり新疆以東における現存最古の石窟様式を、

1. 石窟の形状—平面方形・長方形の塔廟窟で、中心方柱は各層とも上部が下部より広い(これに、周囲の四壁は壁画のみ、の項を付け加えられよう)。
2. 仏像—主に釈迦座像と交脚弥勒菩薩座像の組合せ、次いで仏形の弥勒座像、思惟菩薩座像。

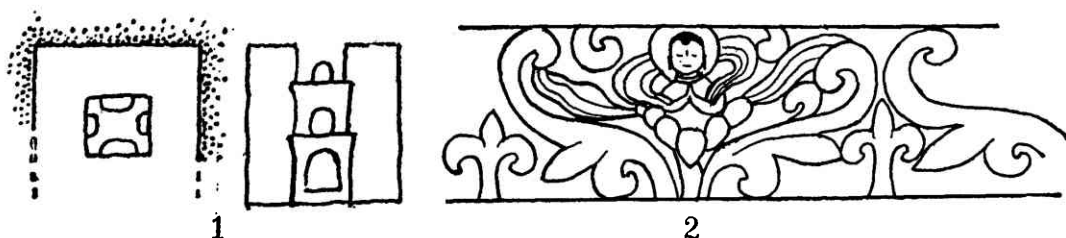


図5 天梯山石窟第一窟

1. 第一窟平面・立面想定図, 2. 最下層辺飾模写  
(宿白氏論考《考古学報》1986-4より)。

3. 壁面一千仏を描く。

4. 装飾文様—忍冬化生像連接文。

5. 仏菩薩の面相—丸まると力強く、眼は切れ長で奥まり、鼻が高い。体軀は雄壮である。菩薩や飛天の姿態は様々で、造形は生き生きとし、飛天は大型である。

そして、こうした特徴を涼州様式と規定している。

とはいえ、既に失われてしまった天梯山第1・4石窟の仏像の復原は誠に困難である。現在甘肅省博物館に展示されている菩薩像壁画は、崩壊していた天梯山第4窟中心柱からすくいだされたものであり、同じく4窟中心柱を飾っていた供養者壁画の2点と併せ、天梯山石窟の北涼沮渠蒙遜による創建当初の様相を窺うことの出来る、数少ない資料である。<sup>25)</sup>

この石窟が史書に記載されている、西秦王沮渠蒙遜発願の石窟である可能性は、早く向達氏によって示唆されてはいたが、実際に石窟を訪れた研究者は先述の史岩氏が初めてである。史岩氏は日中戦争以前、騎馬の日本人が馬上から石窟を望遠鏡で観察していたが、幸いなにごともなかったことを記しているが、昨年の我々の天梯山参観はそれ以来のことである。現地では、ダムの水没から石窟を救うべく、第13大仏窟の前面に巨大なコンクリートの防護壁が出来上がり、水没で傷んだ仏像の修復作業が進められている。我々を案内いただいた張処長が武威市在任時期から始められた事業である。高さ20m近い防護壁の工事には巨額の経費がかかっている。工事が完成すると、現地に展示室を建て、現在甘肅省博物館に保管されている石窟出土資料を展示したいとのことである。大仏窟のほかの石窟へも行けるようにするにはまだまだ多くの困難を克服する必要がある。事業の成功を願いつつ石窟をあとにした。

なお、天梯山石窟の見学記は、同行した氣賀澤保規氏が『中外日報』1998年5月7日と14日号に「中国武威天梯山石窟—歴史的的位置と再評価」及び「中国武威天梯山石窟の現状」と題して発表されている。併せ参考とされたい。

## 7. 青嘴・喇嘛湾吐谷渾墓地

青嘴墓地と喇嘛湾墓地とは武威県城南15kmの祁連山麓に、大水河と水溝河に挟まれた山丘の両側に営まれた吐谷渾王族慕容氏の墓地であって、山丘の北が青嘴墓地、南が喇嘛湾墓地である。

吐谷渾は匈奴が南北に分かれて弱体化したあと、東北地方から匈奴故地へ南下してきた鮮卑族のうちで最も西方へ進出し、土着した一部族である。彼らは今日の青海省を中心に、五胡十六国の風雲に乗って建国し、一時は甘肅省南部から南は四川、西は天山南道の鄯善（楼蘭）、沮末（チェルチェン）までを版図としたが、貞観九年（635）唐に降

り、以後、唐朝の藩屏となり涼州（甘肅武威）、靈州（寧夏靈武県）に余命を保った。武威を祖墳の地としたのはそれ以降である。墓地地点は我々が参観した磨嘴子墓地と早灘坡墓地との間となるが、現地へは行くことが出来なかった。

この慕容氏墓地が注目されはじめたのは1944年、武威を訪れた夏鼐氏が、民国初年から出土した墓誌に関心を抱いてからである。現在はその後の出土資料を含め計10方となり、うち7方が武威の文廟を改修した博物館に並べられている。

文献からの吐谷渾史研究には、周偉洲『吐谷渾史』（寧夏人民出版社、1985年）が参考となろう。

武威の文廟は明代正統二年（1437）に建てられ、中央の孔子廟を挟み、東に文思院、西に儒学院を併せた広大な規模を誇り、“隴右学宮之冠”と称される。亭亭と聳える柏の巨木と古建築が相交じる厳粛な環境である。現在武威市博物館となって各種の展示があるが、その一室で武威を発つ前、我々のために特別に、保管中の優品の数々を見せていただいた。磨嘴子や早灘坡など出土の漢魏代の木製品が主であるが、加えて、吐谷渾王族墓地出土の唐代の出土品を見ることが出来た。これらには、飛びきりの優品があるわけではないが、余り知られていない資料として、紹介しておきたい。

夏鼐氏は1945年、閻文儒氏と共に武威を訪れ、喇嘛湾において吐谷渾墓地の発掘調査を行い、新たに墓誌2方を発見した。発掘の詳細は明らかにされていないが、少なくとも2基を発掘し、氏の2号墓から慕容忠妻金城県主季英墓誌、1号墓から燕王慕容曦光墓誌<sup>26)</sup>が出土した。前者は永徽三年（652）、勅により青海王慕容忠に嫁いだ金城県主季英の墓誌で、季英は開元六年（718）死去し、翌開元七年（719）涼州南の陽暉谷、すなわち武威南郊喇嘛湾に葬られた。墓誌に合葬とある夫の慕容忠の墓は、数米東に営まれた異穴合葬墓で、1927年の武威大地震のあと、墓誌が発見されている。慕容忠は聖歷元年、靈州の私第で死去し、翌二年（699）武威喇嘛湾に帰葬された。

後者の慕容曦光は慕容宣超の嫡子で燕王を称したが、14歳の時長安に出て唐朝に武将として仕えた。墓誌には開元九年（721）“六州胡叛”と、同年“六州胡再叛”に功績があったことを記す。開元十八年（730）朔方郡節度副使に任じられ、部族の居所でもある朔方郡本衙の靈州へ着任したが、開元二十六年（738）49歳で早逝した。妻の武氏墓は1980年発掘の6号墓であるが（後述）、墓誌は1978年に先に発見され、報告されている<sup>27)</sup>。

夏鼐氏は自ら発掘した墓誌2方の詳細な考証を行ったほか、既に武威文廟に収められていた慕容氏墓誌5方についてもその全文を記録し、その記述も含め、史書の缺漏を埋める吐谷渾の年表を掲載している。ただ、夏鼐氏は発掘した墓誌2方を南京へ持ち出して研究したが、その後、この2方の墓誌の所在が不明であるのは残念である。

夏鼐氏以後、青嘴・喇嘛湾墓地の発掘調査は1980年夏、武威県文物管理委員会によって行われ、5基の報告が黎大祥氏によって発表されている<sup>28)</sup>。その5号墓は民国初年に早

く墓誌の出土をみた弘化公主（西平公主）墓である。弘化公主は唐太宗の公女として貞觀十三年（639）青海国王勤豆可汗慕容諾賀鉢に嫁いだ。聖歷元年（698）五月三日、76歳で靈州東衙の私第にて死去し、翌二年三月十八日涼州南の陽暉谷に葬られた。墓は磚築で南を向き、墓道は斜めで地下11mに甬道、4.4×4.58mの略方形の単室墓室を持つ。墓室壁面は全面に石灰が塗られ壁画が描かれていたがすべて剝落している。葬具は木棺で、副葬品には多数の彩色人物俑、馬・駱駝の木俑頭部、染織品、漆器などがあるが、盗掘のため破損が激しい。そのうち、高さ25-27cmの木製男侍俑4体を実見した（図3-2）。彩色が薄く残り、皆、片手を胸におき長い外衣を着るが、3体が風帽をかぶり、鮮卑族の風俗を保っているのに興味をひかれた。弘化公主墓誌は民国初年の発見であるが、その出土墓をうまく突き止められたものである。

1980年発掘の7号墓は慕容若夫人李深の墓である。この墓は1958年土取り中に発見され、墓誌のみが先に報告されている。<sup>29)</sup>李深は景雲元年（710）死去し、開元六年（718）この武威南郊に葬られた。墓誌発見の報告には、ほかに高さ1mの彩画武士俑2体があったという。1980年の発掘では、墓は先述の弘化公主墓と同様の構造でやや小振りである。新たに、彩画木俑と木器の残片、灰陶碗5個が発見されている。

6号墓は前述の通り、夏鼐氏が発掘した2号墓の墓主である燕王慕容曦光の妻、武氏の墓である。盗掘にあってはいたものの、埋葬当初の状況をかなり窺うことが出来る実測図が、この墓群で唯一、公表されている（図6）。傾斜をつけた墓道は南向きで、一部しか掘られていないが幅1.2mある。磚築単室墓で墓門はなく、甬道は蒲鉾天井で幅1.1m、長さ1m、高さ1.16mある。墓室は幅3.25m、奥行き3.25m、高さ4.02m、四壁に

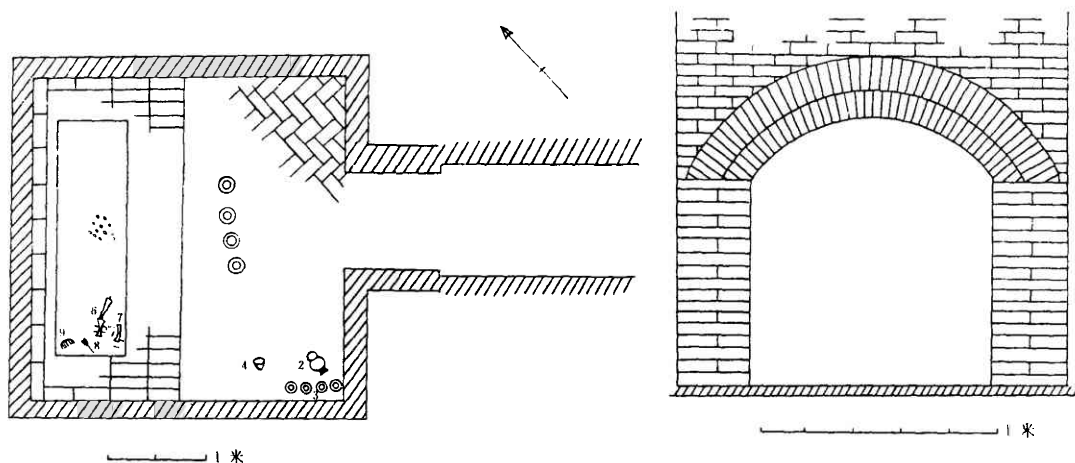


図6 青嘴喇嘛湾武氏墓（6号墓）平面と墓門図

1. 漆盤 2. 白磁尊 3. 灰陶碗 4. 銅碗 5. 棋子
6. 阮咸 7. 樂器残片 8. 骨簪 9. 牛角櫛

（『隴右文博』1996-1〈創刊号〉より）。

石灰を塗り彩画してあった。墓室奥半分全体が高さ0.4mの棺台となり、木棺がその中央に置かれた痕跡がある。棺内には中央部に象牙製の精巧な基石22個、西辺に阮咸と四弦楽器の軸木、牛角櫛、骨簪などがあった。棺台前方の墓室床面には、中央に漆高脚盤4枚が並べられ、西南部に白磁壺、灰陶碗それに銅対葉花形魚水文打出し碗が置かれていた。報告にはほかに石猪、石装飾品、灰陶彩画壺、銀平脱団花文漆紗罩付香炉の写真が載せられている。

墓誌を伴った以上3基の墓のほか、3号墓と4号墓は墓誌を持たない。墓室構造は以上3基とほぼ同様で、いずれも、磚築単室墓である。3号墓は6号墓と同様、墓室後部が高さ21.5cmの棺台となる。木製彩画俑が9点で、深目高鼻で幘頭をかぶった胡人侍俑や高髻の女侍俑の上半身像、木駱駝俑などが出土した。4号墓も同様の墓室構造であるが、棺台はない。男侍俑や馬、駱駝、犬などの木俑が出土している。我々は3号墓の幘頭男半身俑と初唐様式高髻の女子俑(図3-1)や、4号墓の風帽をかぶった鮮卑服飾の男侍俑などをみることが出来た。

青嘴・喇嘛湾の吐谷渾慕容氏墓地からはほかに、弘化公主と同年同日埋葬の青海王慕容忠墓誌、解放後発見で神龍二年(706)に葬られた唐政樂王慕容宜昌墓誌、1927年の武威大地震のあと発見された景龍三年(709)築造の唐輔国王慕容宣徹墓誌、民国初年発見の開元二十六年(738)埋葬の唐代樂王慕容明墓誌があるが、夏鼐氏論考に詳しいので省略する。

吐谷渾慕容氏墓には、武威ではなく寧夏回族自治区同心県偉州発見の墓誌がある。<sup>30)</sup>盗掘された墓からは、ほかに白磁の小盒子2個と白磁小碗1個があった。墓誌は乾元元年(758)埋葬された左領軍衛大將軍慕容威のものである。慕容威の父は武威南山で墓誌の発見されている慕容宣徹である。また夫人は慕容曦光の夫人武氏(前出、この墓誌も武威南山にある)と姉妹である。この慕容威が武威に帰葬されなかったのは、後述のごとく、吐蕃に再び追われ、一族散りぢりになったからである。

祁連山の南を領土としていた慕容氏が涼州武威南郊を祖墳の地としたのは、貞觀九年(635)唐に服属してからである。さらに吐蕃に破れ、咸亨元年(670)薛仁貴による吐谷渾故地回復のための吐蕃との戦いにも成功せず、咸亨三年、靈州の安樂州に移った。ここに紹介した墓誌はそれ以降のものである。吐谷渾部族はさらに至徳年間(756-758)以降吐蕃に更に追われて東遷し、残部衆は朔方郡・河東郡方面に散居した。貞元十四年(798)慕容復が青海王可汗職をついだが幾ばくもなく卒し、その封嗣が絶えた。その後、部族としての活動はあとをたった。

従って、武威の吐谷渾墓地の出土品からは、盗掘の激しさも手伝い、そこに彼ら固有の様相を見つけることははなはだ困難である。出土の風帽俑に辛うじて鮮卑族の伝統服

飾を見ることが出来るが、しかし、このことは、一面、他の鮮卑族ではすっかり廃れた風俗が、依然として伝わっていることに驚かされるといえよう。

一方、唐朝との交流により、濃厚な唐風文化が伝わっている。とりわけ、俑に見られる初唐から盛唐への変化は、この墓地でも忠実に踏襲されている。さらに、降嫁してきた女性墓、とりわけ、即天武后のおいの娘として慕容曦光の妻となった武氏の墓からは、長安の邸宅での華麗な暮らしをしのばせる遺物がみられ、新疆アスターナから出土した囲碁をかこむ婦女図の華麗な絹絵を彷彿とさせるものがある。

## 8. その他の遺跡

武威における先史時代遺跡として皇娘娘台齊家文化遺跡が著名である。<sup>31)</sup>五壩山遺跡から馬家窯文化の彩陶が出土することは先述したが、磨嘴子遺跡にも馬家窯文化の遺物が出土する。<sup>32)</sup>今回の参観では遺址も遺物も調査が及ばなかったため本稿では触れ得なかった。

同様に、武威県城西滕家庄漢墓、<sup>33)</sup>武威市金沙郷趙家磨村南灘魏晉墓、<sup>34)</sup>武威炭鋁機械厂十六国墓<sup>35)</sup>も報告はあるが、遺構も遺物も実見していないのでふれえなかった。以上3墓はいずれも2室以上の多室を持ち、大型の雷台漢墓と五壩山・磨嘴子・旱灘坡墓群との間に位置するものである。そのうち、滕家庄漢墓は封土を持ち、前室と双後室それに耳室からなる。私はかつて、雷台漢墓と磨嘴子墓群の間に位置する、六百石クラスの墓と<sup>36)</sup>考えたことがある。なお検討を深めたい。

## 9. むすび

本稿は昨1997年秋に行った文部省科学研究費補助金（国際学術研究）の報告のうち、甘肅省武威における考察記録である。しかし日記とは異なり、考察内容を時代順に配列し、関係資料を出来るだけ収録して研究の参考としようとした。標題を“簡記”すなわち研究メモとしたのはそのためである。

とはいえ、河西回廊の入り口に位置し、シルクロードの一部をなすこの武威の地は、古来、その覇権をめぐる漢族と北方諸民族が角逐を繰り返す、重要拠点である。2～5節の漢墓群は漢族、6節に取り上げた天梯山石窟の創建者沮渠蒙遜は匈奴、7節の吐谷渾墓地は鮮卑の慕容氏と民族も多様である。本稿のごとき遺跡単位の素描では、その全貌を描き出すいとまがなかった。今回の簡記をもとに、今後の課題とする予定である。

短期の考察に、このように多様な課題に取り組むことが出来たのは、先述の甘肅省文物考古研究所と、地元武威の文物関係諸機関・諸氏の絶大なご厚意によるもので、厚く

感謝申し上げるものである。

本稿は平成9年度文部省科学研究費補助金（國際學術研究）の研究報告の一部である。すでに3年間の研究の全体は大手前女子大学より報告書を刊行した<sup>37)</sup>。本稿を研究報告の2としたのはその一部の続編を意図したからである。また同時に、甘肅省文物考古研究所と我々との間で結成した“中日甘肅古文化遺存考古研究会”の研究成果を兼ねるものである。

## 注

- 1) 秋山進午「“踏燕奔馬”と甘肅省武威の漢墓をめぐる二・三の問題」東京国立博物館美術誌『MUSEUM』No. 337, 1979年4月。
- 2) a. 何双全「武威県韓佐五壩山漢墓群」『中国考古学年鑑—1985』文物出版社, 1985年。  
b. 何双全「武威市五壩山古代墓群」『中国考古学年鑑—1986』文物出版社, 1988年。
- 3) 開館記念特別展図録『シルクロードのまもりーその埋もれた記録』大阪府立近つ飛鳥博物館, 1994年, (以下, <近つ飛鳥図録>と略称)。
- 4) 孫廷成, 李開俊「武威県五壩山頭発現亀形銅炉」<考古与文物> 1988-3。
- 5) 李均明・何双全編『散見簡牘合輯』文物出版社, 1990年。
- 6) 張朋川「由五壩山西漢墓壁画論我国早期山水画」<隴右文博> 1996-1 (創刊号)。
- 7) a. 党国棟「武威県磨嘴子古墓清理記要」<文物参考資料> 1958-11。  
b. 甘肅省博物館「甘肅武威郭家庄和磨嘴子遺址調査記」<考古> 1959-11。
- 8) a. 文物工作報道「武威磨嘴子漢代土洞墓清理簡況」<文物> 1959-12。  
b. 甘肅省博物館「甘肅武威磨嘴子6号漢墓」<考古> 1960-5。  
c. 中国科学院考古研究所・甘肅省博物館『武威漢簡』文物出版社, 1964年。
- 9) a. 甘肅省博物館「甘肅武威磨嘴子漢墓發掘」<考古> 1960-9。  
b. 考古研究所編集室「武威磨嘴子漢墓出土王杖十簡釈文」<考古> 1960-9。  
なお, 1981年磨嘴子墓地出土の“王杖詔書令”26簡が前出, 注5) 文献に収録されているが, 出土状況は不明である。
- 10) 甘肅省博物館「武威磨嘴子三座漢墓發掘簡報」<文物> 1972-12。
- 11) 党寿山「甘肅武威磨嘴子發現一座東漢壁画墓」<考古> 1995-11。
- 12) a. 甘肅省博物館・甘肅省武威県文化館「武威早灘坡漢墓發掘簡報—出土大批医药簡牘」<文物> 1973-12。  
b. 甘肅省博物館・武威県文化館『武威漢代医簡』文物出版社, 1975年。
- 13) 武威県文管会(党寿山)「甘肅省武威県早灘坡東漢墓發現古紙」<文物> 1977-1。
- 14) a. 甘肅省文物考古研究所・天水市北道区文化館「甘肅天水放馬灘戰国秦漢墓群的發掘」<文物> 1989-2。  
b. 甘肅省博物館・敦煌県文化館「敦煌馬圈湾漢代烽燧遺址發掘簡報」<文物> 1981-10。
- 15) a. 武威地区博物館「甘肅武威早灘坡東漢墓」<文物> 1993-10。  
b. 「武威市早灘坡東漢墓」(『中国文物報』1989年12月29日から)『中国考古学年鑑—1990』文物出版社, 1991年。
- 16) 田建「武威市早灘坡西晋・前涼時期墓群」『中国考古学年鑑—1986』文物出版社, 1988年。
- 17) a. 甘博文「甘肅武威雷台東漢墓清理簡報」<文物> 1972-2。  
b. 甘肅省博物館「武威雷台漢墓」<考古學報> 1974-2。
- 18) 前出, 注1)。

- 19) 史岩「涼州天梯山石窟的現存狀況和保存問題」〈文物參考資料〉1955-2.
- 20) 張寶璽「甘肅石窟調查研究的回顧與展望」〈隴右文博〉1996-1 (創刊号).
- 21) 宿白「涼州石窟遺迹和“涼州模式”」〈考古學報〉1986-4 (宿白『中國石窟寺研究』文物出版社, 1996年, 所収).
- 22) a. 王毅「北涼石塔」『文物資料叢刊(一)』文物出版社, 1977年.  
b. 殷光明「敦煌市博物館藏三件北涼石塔」〈文物〉1991-11.  
c. 殷光明「美國克林富蘭藝術博物館所藏北涼石塔及有關問題」〈文物〉1997-4.
- 23) 王素「沮渠氏北涼建置年号規律新探」〈歷史研究〉1998-4.
- 24) 甘肅省文物工作隊「馬蹄寺·文殊山·昌馬諸石窟調查簡報」〈文物〉1965-3.
- 25) 『中國美術全集』繪畫編17, 麥積山等石窟壁畫, 人民美術出版社, 1987年, 図21-23.
- 26) 夏鼐「武威唐代吐谷渾慕容氏墓誌」『考古學論文集』科學出版社, 1961年(原載:『歷史語言研究所集刊』第二十本, 1948年).
- 27) 寧篤學「甘肅武威南宮發現大唐武氏墓誌」〈考古與文物〉1981-2.
- 28) 黎大祥「武威青嘴喇嘛灣唐代吐谷渾王族墓葬」〈隴右文博〉1996-1 (創刊号).
- 29) 党寿山「武威県南山青嘴喇嘛灣又發現慕容氏墓誌」〈文物〉1965-9.
- 30) 鍾侃「唐代慕容威墓誌淺析」〈考古與文物〉1983-2.
- 31) a. 甘肅省博物館「甘肅武威皇娘娘台遺址發掘報告」〈考古學報〉1960-2.  
b. 甘肅省博物館「武威皇娘娘台遺址第四次發掘」〈考古學報〉1978-4.
- 32) 前出, 注7) — b.
- 33) 甘肅省博物館「甘肅武威滕家庄漢墓發掘簡報」〈考古〉1960-6.
- 34) 武威地区博物館「甘肅武威南灘魏晉墓」〈文物〉1987-9.
- 35) 武威市博物館「甘肅武威十六國墓葬清理記」〈文物〉1993-11.
- 36) 前出, 注1) 参照.
- 37) 秋山進午編『遊牧騎馬民族文化的生成と發展過程の考古學的研究——平成7-9年度文部省科學研究費補助金(國際學術研究)報告書』大手前女子大學, 1998年.